関西大学『独逸文学』第 65 号 2021 年 3 月

Lehren の二重目的語構文について
― 文法家の意見を手がかりにして ―

柴　亜矢子

はじめに

動詞が二つの目的語を取り、その目的語同士が異なる場合には、ドイツ語では格を使って目的語の違いを示す。たとえばその目的語が〈人〉を表すときには〈与格〉となり、〈物〉を表すときには〈対格〉となる。この〈与格＋対格〉は二重目的語構文では一般的な組み合わせとなっている。しかし動詞 lehren の場合にはこの組み合わせがあてはまらない。二つの目的語が〈人〉と〈物〉を表しているにもかかわらず、二つの〈対格〉が使われているからだ。したがって lehren の〈二重対格〉はドイツ語の中でも珍しい組み合わせと言える。

しかし〈与格＋対格〉も使われているのである。〈二重対格〉があまりなじみのない組み合わせであることから、広く使われている〈与格＋対格〉が使われるようになっている。つまり lehren のときには、〈人〉を表す目的語を〈対格〉、あるいは〈与格〉で表していることになる。しかしこの〈与格〉は素直に受け入れられたわけではない。今でも〈与格〉が間違いだと主張する文法家もいることから、〈人〉を表す目的語の格表記をめぐる論争は現在でも続いていると言える。

本論文では、文法家は lehren の〈与格〉を以前はどのように評価していたのかを、18 世紀から 20 世紀初旬までの文法書と照らし合わせて明らかにしたい。

1. Lehren の〈人〉を表す目的語の格表記について

現在のドイツ語文法規範では、lehren の〈人〉を表す目的語を〈対格〉だけでなく〈与格〉も認めている。例えば *Duden Grammatik*（1959），

（1966），（1973）では「この（lehren）場合でも、よく使われている〈与格＋対格〉という基本文型にやむをえず移行している」[1]、Zifonun（1997）は、「与格は頻繁に使われているから」[2]、Wegener（1986）は「lehren の前に位置する目的語が対格表記であっても、その目的語が〈人〉を表しているのでそれを間接目的語と解釈し、（その結果与格となっている）」[3]、Bausewein（1990）は、「確かに前にある目的語と後ろにある目的語は対格表記となっているが同じではない。その違いを明らかにするために前にある目的語では与格が使われている」[4] と指摘する。彼らの主張をまとめると、〈与格＋対格〉という組み合わせは二重目的語ではよく使われ、しかも〈人〉を表すときには〈与格〉で表すことになっているということと、それと同時に〈二重対格〉の使用頻度は低いということになる。

この「与格は使用頻度が高く、二重対格は低い」という主張はあながち否定することはできない。例えば Brinkmann（1971）は「二重対格は一般的に不自然なのでそれを使うことを避けている」[5]、Zifonun（1997）は「二重対格を避ける傾向が見られる。〈与格＋対格〉、あるいは〈対格＋前置詞目的語〉へ書き換えるようになっている」[6] と指摘する。つまり〈二重対格〉はあまり使われていないので、〈与格＋対格〉を使っていることになる。

とは言ってもこの〈与格〉を間違いと主張する文法家もいる。例えば Braun（1979）は lehren の〈人〉を表す目的語の格表記に関する調査をドイツ語専攻の学生に行い、被験者の 87% は〈与格〉を間違っていると評価していることを明らかにし[7]、*Wahrig Fehlerfreies und gutes Deutsch*（2003）では「標準語的に見ると、与格＋対格は正しくない」[8]、また Götze（2002）は「話しことばでも書きことばでも与格＋対格は間違い」[9]

1　*Duden Grammatik*（1959[1]: 453），（1966[2]: 489），（1973[3]: 514）
2　Zifonun（1997: 1084f.）
3　Wegener（1986: 12-22）
4　Bausewein（1990: 98）
5　Brinkmann（1971[2]: 406f.）
6　Zifonun（1997: 1084f.）
7　Braun（1979: 149- 155）
8　Dittmann（2003: 514f.）
9　Götze（2002[3]: 444）

と指摘する。Braun（1979）の調査結果から、lehren が二つの目的語をとる場合には〈二重対格〉にする意識が高く、しかも〈二重対格〉だけが正しいと判断していることがわかる。したがって lehren の〈人〉を表す目的語の格表記には、〈二重対格〉という伝統的な用法と〈与格＋対格〉というよく使われている用法の二つがあり、〈二重対格〉のほうがよく使われているのである。

かといってこの〈与格＋対格〉が新しい用法とも言えない。18 世紀に Adelung（1782）は〈与格〉を提案している[10]が、しかしそれ以前から〈与格〉は使われていたのである。例えば Grimm（1885）は「14 世紀から〈所有〉の意味で使われている」[11]と指摘する。Grimm（1885）の「〈二重対格〉はラテン語やゴート語で使われていた」[12]という発言と比較すると、〈与格〉には伝統がないことになるが、しかし現在から見ると〈与格〉も〈対格〉に負けず劣らずの歴史を持っていると解釈することができる。したがって〈与格〉を使っていたとしても何の疑問もないはずである。例えば柴（2020）は、「18 世紀から 19 世紀半ばまで活躍したゲーテは〈人〉を表す目的語を〈対格〉でも〈与格〉でも表記しており、また〈対格〉から〈与格〉に書き変えている」[13]と指摘する。このゲーテの表記変更をした事例からも、〈対格〉も〈与格〉も併用されていることを読み取れるだけでなく、さらに〈対格〉と〈与格〉との違いはそれほど大きくないということも読み取れる。

このように広く使われていた〈与格〉に関して、ゲーテと同時代に活躍した文法家はどのように主張していたのかを明らかにしていきたい。

2. 調査対象について

今回は 18 世紀から 20 世紀初旬に発行された文法書や辞書を査対象としている[14]。調査対象資料は 39 点にのぼり、その内訳は、18 世紀は 10

10　Adelung（1782: 450f.）

11　Grimm（1885: 559- 570）

12　Ibd.

13　柴（2020: 16）

14　今回調査した文献の出版年だけを見ると、20 世紀に位置づけされる文法書があ

冊[15]、19 世紀は 29 冊[16]となる。今回の調査項目は次の三点である。①〈人〉を表す目的語を〈対格〉で表しているのか、あるいは〈与格〉で表しているのか、②〈対格〉が使われている根拠、あるいは〈与格〉が使われている根拠は何か、③受動変形をした場合に、〈人〉を表す目的語は主語になるのか、あるいは〈与格〉になるのか、である。③の「受動変形」とは、能動文の〈対格〉は、受動文に書き換えたときに主語になるというところに端を発している[17]。lehren の能動文では〈人〉を表す目的語は〈対格〉が使われているので、受動文に書き換えると主語となる。ところが〈人〉を表す目的語が、受動文では〈与格〉になっているのである。もし〈与格〉ならば、その能動文でも〈人〉を表す目的語は

るが、しかし以下の三つの理由から 19 世紀に位置づけている。例えば Heyse は 1923 年に 29 版が出版されているが、しかし初版が 1886 年に出版されていることから 19 世紀に位置づけている。例えば Sanders（1908[43/44]: 253）も Paul（1919[4]: 253f.），（1935[4]: 392）も Engel（1918[21]: 271f.）も Behagel（1923: 698- 701）も 20 世紀に出版されているが、しかし彼らの主張は 19 世紀の文法書の内容と同じであることから、19 世紀に分類している。また Fischer（1929: 404）の辞書はゲーテの用語をまとめている。ゲーテが活躍したのは 18 世紀から 19 世紀であることから、19 世紀に入れている。

15　早く出版された順番に列挙する：Aichinger（1754: 413f.），Gottsched（1762[5]: 466），Adelung（1781: 473），（1782: 450f.），（1796[2]: 1986ff.），Stutz（1789: 478f.），（1790: 407），（1793: 202），Motitz（1794[3]: 167），Heynatz（1803[5]: 245f.）である。なお Haynatz（1803）は 1770 年に初版が出されていることから、18 世紀に分類している。

16　Reinbeck（1802: 84），（1804: 108），（1820: 80），Heinsius（1816[5]: 178），Schmitthenner（1822: 260），（1826: 263），（1828: 65），Becker（1829: 337），（1870: 200），Götzinger（1839: 68f.），Klopstock（1839: 167），Heyse（1849[5]: 117f.），（1923[29]: 440f.），Grimm（1885: 559- 570），Kehrein（1854: 115），Schötensack（1856: 626ff.），Vernalken（1863: 13-16），Michelsen（1878[3]: 120ff.），Engelien（1892[4]: 390f.），Gurckes（1893[22]: 122），Wenig（1896[8]: 476f.），Heinze（1897[8]: 142f.），Lyon（1897: 109），Sanders（1908[43/44]: 253），Paul（1919[4]: 253f.），（1935[4]: 321f），Engel（1918[21]: 271f.），Behagel（1923: 698- 701），Fischer（1929: 404）である。

17　Bekommen や haben は対格目的語を取るが、しかしそれを受動文の主語に書き換えることはできない。Lehren は bekommen や haben のように受動文を作ることができない動詞の中に含まれていないことから、対格目的語を受動文の主語に書き換えることが見込まれる。

〈与格〉となる。つまり受動文の〈与格〉は、能動文では〈与格＋対格〉になること示していることになる。したがって〈人〉を表す目的語が受動文の〈主語〉になるのか、〈与格〉になるのかということは、能動文の〈二重対格〉、あるいは〈与格＋対格〉を主張する手がかりとなる。

この三点を調べてみると、昔も今も〈二重対格〉が使われていることがわかる。もちろん〈与格＋対格〉も使われているが、しかし〈二重対格〉と比較すると、〈与格〉は頻繁に使われていないと指摘する文法家もおれば、あるいは〈与格〉は間違いと指摘する文法家もいたのである。この〈与格〉に関する意見は 100 年ごとに変化している。その主張を 18 世紀、19 世紀というように、世紀ごとに段階を追って説明していきたい。

3. 〈人〉を表す目的語の格に関する 18 世紀の文法家の解釈

a）Lehren の〈与格＋対格〉は二番手の用法

18 世紀では「lehren は二重対格を取る」とだけ記載する文法書が見られる。例えば Aichinger（1754）や Moritz（1794）や Hynatz（1803）は「lehren は二重対格となる」[18] と主張する。彼らは〈与格〉に関して触れていないことから、lehren の〈二重対格〉だけしかなかったということがわかる。

このように〈二重対格〉しかなかった状況で、〈与格〉が突然出てきたわけではない。Adelung（1796）は、「学問と関係のない生活では与格が一般的」[19] と述べる。「学問と関係のない生活」とは日常生活のことを指し、そこでは〈与格〉が使われていることになる。したがって〈与格〉も日常生活では広く使われていたことがわかる。

しかし〈与格〉を批判する文法家もいた。例えば Gottsched（1762）は、「与格は気まぐれで一部の人が使い始めている」[20] と指摘する。「気まぐれ（eine Unbeständigkeit）」とは、そのときどきの思いつきや気分で

18　Aichinger（1754: 413f.）, Moritz（1794[3]: 167）, Heynatz（1803[5]: 245f.）

19　Adelung（1796[2]: 1986ff.）

20　Gottsched（1762[5]: 466）

〈与格〉を使っていることになるので、どんな時でも〈与格〉が使われていたとは言えない。したがってこの Gottsched（1762）の発言から、〈与格〉は〈二重対格〉に次いだ用法と読み取ることができる。

ところがこの Gottsched（1762）の発言には続きがあり、そこからも〈与格〉は普段から使われていたことを読み取れる。例えば、「この与格は間違っているので、文法家や作家は使わないように」[21] と締めくくっている。〈与格〉の原因は lehren と lernen とを混同しているからだと Gottsched（1762）は主張しているのである[22] が、しかしここまで言う必要はないだろう。lehren が〈二重対格〉を取るのが当り前ならば、〈与格＋対格〉になるのはありえないはずだからである。もし〈与格〉があったとしても、それは「気まぐれ」に使われたことに過ぎないだろう。

しかもこの「気まぐれ」の原因を、Gottsched（1762）は lernen が〈与格＋対格〉を取っているからであると説明しているが、これも納得できない。Lehren と lernen を綴りという点から見ると、h と n という点で異なっている。もし手書きで書いた場合、あるいは読んでいる場合でも、h と n とを取り違えることは考えられる。もしそうであれば、lehren の〈与格〉は lehren と書かなければならないところを h ではなく n と書いたり、読んだりすることによって生じたことになる。つまり誤用によって lehren の〈与格〉になっていることになるだろう。

しかし lernen は「～を学ぶ」という意味を取る場合には、目的語は一つしか取らない。つまり lernen は二つの目的語を取らないので、Gottsched（1762）は「与格は lehren と lernen とを取り違えている」と主張する必要はないのである。にも関わらずこのような主張をわざわざしたのは、Gottsched が思っているよりも、実際には〈与格〉が使われていたからであると推測する。つまりこの〈与格〉を Gottsched は認めたくなかったので、「この与格は間違っている」と主張したのである。したがって Gottsched（1762）の主張から、〈与格〉が使われていたことを読み取れる。

21　Ibd.

22　Ibd.

b)〈与格〉の用法の根拠

先述した通り、〈与格〉を全面的に推し進めたのは Adelung（1781）（1796）である。彼が〈与格〉を提案した根拠は、

1)「学問と関係のない生活では与格が一般的」[23]

2)「類推」[24]

の二つにまとめることができる。1)「学問と関係のない生活では与格が一般的」とは、先述しているように日常生活では〈与格〉が使われていることを指す。そのことから、学問と関係している場合には〈二重対格〉になると予測できる。だから Adelung（1782）（1796）は〈二重対格〉のことを「ラテン語の摸倣」[25]、あるいは「古臭い」[26] と評価したのである。2)「類推」とは、未知のことに遭遇した時に今まで培った経験から物事を予測して考えることである。「未知のこと」とは lehren の二重目的語構文の二つの目的語の格表記はどうなるかという問いとなり、「今まで培った経験」とは〈人〉を表すときには〈与格〉となり、〈物〉を表すときには〈対格〉となる。つまり〈与格＋対格〉になることが予測される。したがって Adelung は〈与格＋対格〉を提案したのである。

Stutz（1789），（1790），（1793）も Adelung と同様に〈人〉を表す目的語を〈与格〉にすることを提案している。例えば「物を表す目的語が対格[27] ならば、人を表す目的語は与格となる」[28] と説明する。二つの目的語が〈物〉と〈人〉を表しているので、目的語の役割は異なっている。その違いを示すために、〈与格＋対格〉ということを導き出したのである。

Adelung や Stutz が〈与格〉を提案したのは、二つの目的語が〈人〉と〈物〉というように、種類が異なっているからだけではない。確かに〈与格＋対格〉は一般的に使われていると Adelung は主張しているが、しかし〈二重対格〉が優勢な中でほかの二重目的語の用法を lehren に転

23　Adelung（1796[2]: 1986ff.）

24　Adelung（1781: 473）

25　Adelung（1782: 450f.）

26　Adelung（1796[2]: 1988）

27　本文では名詞となっているが、文脈から「対格」と訳している。

28　Stutz（1789: 47f.）

用させているとは考えにくい。そのことから考えると、〈与格＋対格〉も使われていたとことが推測される。

c）受動変形

18 世紀では、受動文で〈人〉を表す目的語が〈与格〉に書き換えられていることに関して三つの意見がみられる。1）受動文の〈与格〉と能動文の〈与格〉とを結び付けている文法家と 2）（受動文の与格と能動文の与格とを）結び付けていない文法家、3）lehren の受動文はないと主張する文法家、の三つである。2）に関して、たとえば Aichinger（1754）は lehren の〈人〉を表す目的語が〈与格〉に書き換えられていることを取り上げているが、しかしこの受動文の〈与格〉が能動文の〈与格〉にはなると断定していない[29]。ただ、「人を表す目的語を受動文の主語に書き換えると居心地が悪いので与格にしている」と指摘する[30]。もちろん〈人〉を表す目的語を受動文の主語に書き換えることは十分考えられるが、しかし書き換えられていることは〈ない〉のである。Aichinger（1754）は〈二重対格〉を支持しているが、しかし能動文の〈与格〉のことは何も述べていないからである。つまり Aichinger は能動文では〈二重対格〉になり、受動文では〈物〉を表す目的語は〈主語〉となり、〈人〉を表す目的語が〈与格〉になっていると主張しているに過ぎない。したがって Aichinger（1754）のように、受動文の〈与格〉と能動文の〈与格〉とを分けて考える文法家もいたのである。

3）のように、lehren の受動文を作ることができないと主張する文法家もいる。例えば Heynatz（1803）は「受動文を作ることはできない」[31]と指摘する。この受動文を作ることができない理由として、〈人〉を表す目的語が受動文の主語になっていないことが考えられる。例えば Aichinger（1754）は受動文について言及しているが、しかし〈人〉を表す目的語を受動文の主語に書き換えるのは「居心地が悪い」と指摘している。この Aichinger（1754）の発言から、主語に書き換えているケー

29　Aichinger（1754: 413）

30　Ibd.

31　Heynatz（1803[5]: 245f.）

スも見られるが、しかしその数は少ないことがわかる。確かに Aichinger（1754）は「（〈人〉を表す目的語は受動文の）与格に書き換えられている」と指摘しているが、しかしそのような〈与格〉をもしかすると Heynatz は認めなかったのかもしれない。そうすると「受動文を作ることはできない」ということになる。しかし〈ない〉というのは具合が悪いので、その受動文の代わりに「日常では unterweisen を使って受動文に書き換えている」と指摘したのである。したがって代案を提案することにより、〈人〉を表す目的語の格表記の問題を回避しようとしたのである。

1）のように受動文の〈与格〉と能動文の〈与格〉とを結び付けようとする者もいた。例えば Adelung（1782），（1796） や Stutz（1789），（1793）は、受動文で〈与格〉が使われている[32]ことを、能動文で〈与格〉が使われる根拠とした[33]。受動文で〈与格〉が使われているならば、それは能動文でも〈与格〉になるからだ。つまり能動文で〈与格＋対格〉があることを証明することになる。したがって Adelung や Stutz はこの受動文の〈与格〉を能動文の〈与格〉の存在を示す根拠とし、能動文でも〈与格〉を使うことを提案したのである。

4. 〈人〉を表す目的語の格に関する 19 世紀の文法家の解釈

a）〈与格〉の台頭

18 世紀に Adelung が〈与格〉を提案して以来[34]、〈与格〉に賛同する文

32　Adelung（1781: 473），（1796[2]: 1986ff.），Stutz（1789: 47f.），（1793: 202）

33　Adelung（1781: 473），（1796[2]: 1986ff.），Stutz（1790: 407）

34　Engel（1918[21]: 271f.）は、「Adelung が 18 世紀に与格が受動文や能動文でも使われていることを考え、それによって、文法を恣意的に解釈した」と指摘する。この「文法を恣意的に解釈した」とは、lehren では〈二重対格〉が規範となっているが、しかし〈与格＋対格〉も使われていた。Adelung は、この〈与格＋対格〉という組み合わせが二重目的語構文では一般的に広く使われていることを根拠に挙げ、この〈与格〉を lehren にもあてはめようとした。つまり「文法を恣意的に解釈した」とは、Adelung が〈与格〉を提案したこと指している。この Adelung の〈与格〉の提案が、後に〈人〉を表す目的語の格表記の揺れが生じ、ひいては文法の混乱

法家が出てくるようになる。例えばReinbeck（1802）は「lehrenの場合には二つの目的語の格表記を変える必要がある」[35]、Schmitthenner（1822）やBecker（1829）は「教えているものが対格で表されていたら、人を表す目的語は与格で表す」[36]、Götzinger（1839）は「与格＋対格は日常語で使われている」[37]、Wenig（1896）は「授業科目が対格で表されている場合には、〈人〉を表す目的語をときどき3格[38]で表す」[39]と指摘する。つまり〈与格＋対格〉という組み合わせは二重目的語構文の一般的な規範である[40]ので、それをlehrenの二重目的語にもあてはめようとしたのである。

このように〈与格〉支持者が増加したことにより、〈人〉を表す目的語を〈対格〉にするか〈与格〉にするかについてどうすればいいかわからないと発言する文法家が出てくる。例えばBecker（1829）もGurckes（1893）も「人を表す目的語の格の表記で揺れが見られる」[41]、Schmitthenner（1828）は「人を表す格の表記が対格と結びつくのか与格と結びつくのかということは文法的な論点となっている」[42]、Götzinger（1839）もVernalken（1863）も「（lehrenの人を表す目的語の格表記に関しては）特別に注意する必要がある」[43]と指摘する。文法家が続々と〈与格〉も規範化することを求める一方、その反動で〈二重対格〉の厳密な規範化を推し進めようとする文法家もいた。つまり〈対格〉という規範と〈与格〉という規範とが対立するようになり、その結果〈対格〉と〈与格〉の間で迷う文法家も出てくるようになった。このような悩みも〈与格〉の躍進を示していると言える。

が起こした、とエンゲルは主張したのである。

35　Reinbeck（1802: 84）

36　Schmitthenner（1822: 260）, Becker（1829: 337）

37　Götzinger（1839: 68f.）

38　与格のこと

39　Wenig（1896[8]: 476f.）

40　Heyse（1849: 117f.）は「一般的な規範によると、目的語が人と物を表す場合には、それぞれ与格、対格となる」と指摘する。

41　Becker（1829: 337）, Gurckes（1893[22]: 122）

42　Schmitthenner（1828: 65）

43　Götzinger（1839: 68f.）, Vernalken（1863: 13-16）

b）歴史的な観点

〈二重対格〉は歴史のある用法と言われている。例えば Grimm（1885）や Engel（1918）は、「二重対格はゴート語という非常に古い時代からなじみのある組み合わせである」[44]、Mischelsen（1878）は「ラテン語から受け継がれている」[45]、Heyse（1923）は「中高ドイツ語、新高ドイツ語といったように、あらゆる時代で使われている」[46] と指摘する。つまり〈対格〉には歴史があることになるが、しかし〈与格〉にも歴史があると主張する文法家もいる。例えば Heintze（1897）は「与格は中高ドイツから見られ、初期新高ドイツ語でも見られる」[47] と主張する。〈与格〉も〈対格〉に劣らず歴史を持った用法と言える。

c）作家の使用

〈二重対格〉は作品の中で使われている。例えば Schmitthenner（1822）や Wenig（1896）は「偉大な作家が（二重対格を）使っている」[48]、Heintze（1897）は「ルターやハンス・ザックスが二重対格を使っている」[49]、と指摘する。つまり〈与格〉も作品の中で使われていると主張する者が出てくる。例えば Schötensack（1856）は「新高ドイツ語時代の作家は稀にしか与格を使わない」[50]、Heyse（1923）は「与格を使う古典作家がいる」[51]、また Sanders（1908）は偉大な作家の〈与格〉の事例を挙げ[52]、Heinze（1897）は「シルマーやヴィンケルマン、ゲーテ、ティック

44　Grimm（1885: 559-570）, Engel（1918^{21}: 271f.）
45　Mischelsen（1878^{3}: 120ff.）
46　Heyse（1923^{29}: 440f.）
47　Heintze（1897^{8}: 142f.）
48　Schmitthenner（1822: 260）, Wenig（1896^{8}: 476f.）
49　Heintze（1897^{8}: 142f.）も Engel（1918^{21}:271f.）も「ルターやシラー、ゲーテが（二重対格を）使っている」と指摘する。
50　Schötensack（1856: 626ff.）
51　Heyse（1923^{29}: 440f.）
52　Sanders（$1908^{43/44}$: 253）

は与格を使っている」[53] と指摘する。

ここで気になるのは、まず「与格が稀である」という箇所である。「与格が稀」とは、〈対格〉と比較すると使用頻度が少ないということと、それと同時に「与格はわずかであるが使われている」とも読み取れる。したがってこの「稀である」とは、「二重対格と比較すると与格は稀にしか使われていないということになるが、しかし少しだけ（与格が）使われている」とも解釈できる。したがって〈与格〉が使われていたと言える。

次に気になる点は、ゲーテが〈対格〉も〈与格〉も使っているという箇所である。例えば Götzinger（1839）は「与格を間違っていると判断している作家は少なくとも誰もいない」[54] と指摘したのは、〈対格〉も〈与格〉も併用していたゲーテのような作家がほかにもいたからだろう。しかしこのゲーテの併用は〈二重対格〉支持者にとっては厄介である。ゲーテ作品は〈二重対格〉を推し進めるための手本にならないからである。つまりゲーテが〈与格〉を使っているならば、そのことはほかの人にも影響を及ぼし、〈二重対格〉ではなく、逆に〈与格〉を拡散させてしまうことになる。だから Heyse（1923）は、「古典作家が与格を使っているからといっても、そのことが与格がを使われていることを証明しているとは言えない」[55] と主張したのである。

d）〈二重対格〉の厳格な規範化

今回調査した 19 世紀の文法書では、〈二重対格〉を強固な規範にしようとする動きが見られる。例えば Vernalken（1863）は、「新しい時代では（二重対格を）規範化している」[56] と指摘する。今までの文法書では「規範」という文言はなかったが、しかし 19 世紀になって見られるようになる。その原因は〈与格〉の台頭にあるだろう。例えば Klopstock（1839）は「18 世紀に人を表す目的語を与格で使うことが頻繁に見られ

53　Heinze（1897[8]: 142f.）
54　Götzinger（1839: 68f.）
55　Heyse（1923[29]: 440f.）
56　Vernalken（1863: 13-16）

るようになり、ことばを厳しく運用することによって矛盾が高まるようになった。上流社会でも一般的な市民の間でも与格を使うが、しかし対格を使うのがドイツ語である」[57] と指摘する。〈与格〉を使っているにもかかわらず、〈与格〉は公的には認められていない。しかしあまり使われていない〈対格〉だけが公的には認められているというおかしな状況になっていた。だから〈対格〉だけが公共の場で認められていることをわざわざ明記しなければならなかったのである。Vernalken（1863）や Klopstock（1839）の指摘から、〈与格〉を意識して〈二重対格〉だけが唯一無二の規範にしようとしていることを読み取れる。

e）二重対格の逆襲

〈与格〉をここまで押し上げた原因は〈二重対格〉のほうにもある。例えば Heyse（1849）は「言語の歴史や言語規範に関心がないからといって与格が生じたわけではない」[58] と指摘する。先述しているように〈二重対格〉には伝統があるので、lehren が出て来たら条件反射的に〈二重対格〉を使えばいいはずであるが、しかしそうではなかった。例えば Kehrein（1854）や Schötensack（1856）は、〈二重対格〉は「限定された用法なので、広く使われていない」[59] と指摘する。「限定された用法」とは、〈二重対格〉を取る動詞 [60] が少ないことをここでは指している。つ

57　Klopstock（1839: 167）によると、「上流階級の人も一般の人も lehre dir と言うが、lehre dich がドイツ語である」と述べている。Lehren は一つの目的語を取る場合には、必ず対格となる。その点から考えるとこの lehre mir は、mir という与格が使われていることからおかしいはずである。しかしここでは「何かを教える」の「何かを」が省略されていると考えるのが適切であろう。つまり lehre dir die Sprache、あるいは lehre dich die Sprache というように die Sprache といったように、「教える物」を文に補足する必要がある。

58　Heyse（1849: 117f.）

59　Kehrein（1854: 115）, Schötensack（1856: 626ff.）

60　*Duden*（2016[9]: 403）によると、二重対格を取る動詞は、abfragen, abhören といったような動詞がある。動詞 heißen は、二つの目的語が主語と述語を表す場合には〈二重対格〉となるので、〈与格＋対格〉になることはない。このように二つの目的語が述語関係になる動詞は今回の調査では取り上げていない。

まり〈二重対格〉はあまり使われていないので、普段の使用には向いていない。したがって「単なる例外として表面化している」[61] というのが現状である。それに対して、〈人〉を表す目的語を〈与格〉で表すことはよくあることなので、〈与格〉に置き換えられる可能性は高くなる。その〈与格〉になることを防ぐために、〈二重対格〉が文法規範であることをはっきり文書で表し、積極的に保護しようする文法家もいたのである。

〈二重対格〉を保護するために、19 世紀の文法家たちは、三つの観点から〈与格〉を徹底的に非難した。一つは「与格は間違い」と宣言することである。例えば Becker（1870）は「与格は間違い」[62]、Heyse（1923）は「与格は語法に反している」、あるいは「与格は文法の横暴である」[63] と主張する。そもそも「横暴」とは法律を無視して勝手なことをすることである。ここでは〈二重対格〉が規範であるにもかかわらず、勝手に〈与格〉も規範にすることを指している。確かに〈与格＋対格〉は一般の二重目的語構文では規範となっているが、しかしそれを lehren の二重目的語構文に適用し、規範化するのはおかしいと反論する。というのは lehren にはそもそも〈二重対格〉という規範が存在しているので、二つはいらない。つまりすでに〈二重対格〉があるので、〈与格〉は要らないことになる。したがって「横暴」という乱暴なことばをあえて使うことによって、Heyse は〈与格〉を使うことは〈二重対格〉という規範を犯していると指摘したのである。

もう一つは、〈与格〉が限定的な用法だと示すことである。例えば Vernalken（1863）は「方言の中では、lernen と lehren とを混同して与格を使っている」[64]、また Götzinger（1839）は「民衆語（die Volkssprache）では与格となっている」[65]、Heyse（1849）は「北ドイツでは与格を使っている。しかし北ドイツでは与格と対格の区別があいまいになってい

61　Heyse（1849[5]: 117f.）
62　Becker（1870: 200）
63　Heyse（1923[29]: 440f.）
64　Vernalken（1863: 13-16）
65　Götzinger（1839: 68f.）

る」[66]、Behagel（1923）は「与格は南ドイツの方言（die süddeutsche Volkssprache）である」[67] と指摘する。方言とはその地方だけで使われていることばであり、民衆語は民衆の間で使われていることばである。つまり方言であれ、民衆語であれどちらも使われていることには変わりがないが、しかしドイツ語母語話者すべてが使っていることばではない。つまり〈与格〉の使用者は一部に限定されるので、〈与格〉を規範化することはできないと判断したのである。

〈与格〉はフランス語から流入しているという意見もある。例えば Heyse（1923）は「与格はフランス語の影響である」[68]、Fischer（1929）や Paul（1935）は「17 世紀からフランス語の影響で与格が使われている」[69] と指摘する [70]。先ほど Klopstock（1839）が「対格を使うのがドイツ語だ」[71] と指摘したが、この発言は、〈与格〉が広く使われているにもかかわらず、〈対格〉しか認めていないことと同時に、「与格を使うのはドイツ語以外の言語である」と解釈できる。つまり〈与格〉はドイツ語ではなく、フランス語から入ってきたので認めないということになる。だから Heyse（1923）は「与格は我々のドイツ語の生命を傷つける」[72] と指摘し、〈人〉を表す目的語の格表記の論議に、〈フランス語〉をあえて出すことによって、〈ドイツ人〉であることを意識させ、〈与格〉を使わないように画策したと読み取れる。

このような三つのやり方で、文法家は〈与格〉を攻撃し、〈二重対格〉を積極的に保護したのである。

66　Heyse（1849^{5}: 117f.）

67　Behagel（1923: 699f.）

68　Heyse（1923^{29}: 410f.）

69　Fischer（1929: 404）, Paul（1935^{4}: 321）

70　Behagel（1923: 700）、Fischer（1929: 404）、Paul（1935^{4}: 321）は「17 世紀にフランスからオランダを経由しドイツに与格の用法が入ってきた。つまり与格はフランス語の影響だろう」と指摘する。

71　Klopstock（1839: 167）

72　Heyse（1923^{29}: 410）

f）受動変形

18 世紀に Adelung や Stutz は受動文で〈与格〉が使われていると主張した影響が 19 世紀に強く見られるようになる。たとえば Götzinger（1839）は「人を表す目的語を与格にする」[73]、Sanders（1908）は「物を表す目的語を主語にし、人を表す目的語を対格にするのは一般的な受動文の形ではない。人を表す目的語を与格にするのが普通である」[74]、Gurckes（1893）や Heintze（1897）や Engelien（1892）は「人を表す目的語を与格にするのが一般的である」[75] と述べる。Gurckes（1893）にしても Heintze（1897）にしても Engelien（1892）にしても、確かに受動文で〈与格〉が使われている状況を述べているが、しかしその受動文の〈与格〉は能動文の〈与格〉に由来しているとまで指摘していない [76]。つまり受動文の〈与格〉と能動文の〈与格〉とを切り離し、能動文の〈与格〉を提案しているとまでは言えない。

受動文の〈与格〉と能動文の〈与格〉とを結び付けている文法家の数はそれほど多くはない。例えば Götzinger（1839）が〈与格〉を規範化するための根拠を二つ挙げている [77]。まず受動文で〈与格〉が使われていること、もう一つは受動文では主語に書き換えられていないと指摘している [78]。受動文の〈与格〉と能動文の〈与格〉とを結びつけていたのは Götzinger（1839）のみで、大半は「受動文の主語になるのは稀である」と指摘したのである。例えば Schötensack（1856）は「人を表す目的語を主語にするのは好まない」[79]、Sanders（1908）や Engelien（1892）は「人を表す目的語を（受動文の）主語にするのは稀だ」[80] と指摘し、さらに受動文の〈与格〉になるとは指摘している。しかし Schötensack

73　Götzinger（1839: 68f.）
74　Sanders（$1908^{43/44}$: 253）
75　Gurckes（1893^{22}:122）, Heintze（1897^{8}: 142f.）, Engelien（1892^{4}: 390f.）
76　Ibd.
77　Götzinger（1839: 68f.）
78　Ibd.
79　Schötensack（1856: 626ff.）
80　Sanders（$1908^{43/44}$: 253）, Engelien（1892^{4}: 390f.）

（1856）にせよ、Sanders（1908）にせよ、Engelien（1892）にせよ、彼らは受動文の〈与格〉と、能動文の〈与格〉とを結びつけていない。したがって受動文の〈与格〉と能動文の〈与格〉とを切り離し、違うものと見なしていることがわかる。

〈人〉を表す目的語が受動文の主語になると主張する文法家もいる。例えば Heyse（1849),（1923）は「人を表す目的語が（受動文の）主語となる」[81] と指摘する。「Ihm wird eine Sprache gelehrt. が間違っているのは、（その受動文は）Man lehrt ihm die Sprache.（という能動文）を前提にしているからだ」[82] と説明する。つまり〈人〉を表す目的語は能動文では〈対格〉表記なので、受動文では主語になるので、〈与格〉に書き換えられることはない。だから Heyse（1923）は「人を表す目的語を受動文で与格に書き換えることは間違っている」[83] と指摘したのである。

さらに Heyse（1923）は「物を表す目的語を（受動文の）主語、人を表す目的語を対格にするのは間違いである」[84] と指摘する。というのは〈物〉を表す目的語は対格表記になっているが、しかし〈人〉を表す目的語と同じ種類の〈対格〉と見なしていないからである。「物を表す目的語は対格の形を保持しなければならない。というのは、物を表す目的語は動詞と同じ関係ではないからである」[85] と Heyse（1849）は指摘しているからである。「動詞と同じ関係」とは、動詞が表す意味を補足することである。例えば lehren の場合には、「～に…を教える」という意味を持っているので、「～に」に当てはまる〈人〉を表す目的語と、「…を」にあてはまる〈物〉を表す目的語という二つの目的語を取ることができる。ところがこの Heyse（1849）の主張、「物を表す目的語と動詞は同じ関係にはない」から、〈人〉を表す目的語と動詞は同じ関係にあるが、しかし〈物〉を表す目的語は動詞と同じ関係にない、ということになる。つまりこの二つの対格目的語には二つの段階があり、「～に」にあたる〈人〉を表す目的語は動詞と同列と見なしているが、しかし

81　Heyse（1849^{5}: 117f),（1923^{29}: 440f.）
82　Heyse（1849^{5}: 117f.）
83　Heyse（1923^{29}: 440f）
84　Ibd.
85　Heyse（1849^{5}: 117f.）

「～を」にあたる〈物〉を表す目的語は動詞と同列と見なしていないということになる。したがって「人を表す目的語は受動文の主語に書き換えることはできるが、しかし物を表す目的語を受動文の主語に書き換えることができない」と Heyse は主張したのである。

ほかの表現を使うことで受動文への書き換えを回避していると指摘する文法家もいる。例えば Engelien（1892）は「lehren と同じ意味を持つ動詞を使って書き換えるのが一番いい」[86] と指摘する。〈人〉を表す目的語は受動文の主語になる、あるいは〈与格〉になると議論しても、どちらか一つに決められなかったのかもしれない。あるいは〈人〉を表す目的語が受動文の〈主語〉、あるいは〈与格〉に書き換えられていても非難されるのならば、どちらも使わないほうが賢明だと思い、ほかの動詞を使ったのかもしれない。したがって受動文で〈人〉を表す目的語が主語になるか〈与格〉になるかということに関しても、意見の一致が見られないことがわかる。

j）おわりに

lehren の〈与格〉の用法を、文法家はどのように評価したのかを、18 世紀から 20 世紀までに出版された文法書を手がかりに検証した。18 世紀から 20 世紀初旬までのおよそ 200 年の文献調査をした結果、〈与格〉を認める兆しが見える。

18 世紀では lehren が〈二重対格〉になることに誰も疑問を持っていなかったことから、〈二重対格〉の慣習化、あるいは〈二重対格〉になるという意識の高さを見て取れる。しかし 18 世紀後半に Gottsched が〈与格〉を間違いと指摘したり、あるいは Adelung が〈与格〉を提案したりすることにより、〈与格〉が脚光を浴びるようになり、Stutz をはじめとした文法家はこぞって、〈与格〉を使うように提案するようになる。

19 世紀になると〈与格〉と〈二重対格〉のせめぎ合いが始まる。〈二重対格〉には長い歴史があるといえば、〈与格〉にも歴史があると指摘し、作家が〈二重対格〉を使っているといえば、〈与格〉も使われてい

86　Engelien（1892[4]: 390f.）

ると主張した。その結果〈二重対格〉と〈与格〉との間で格の表記に悩む文法家まで現れるようになった。確かに 19 世紀では〈与格〉の勢いが強くなっているが、しかし〈与格〉を認めようとしない文法家もいた。〈二重対格〉だけが唯一無二の規範だと主張し、〈与格〉を三つの点から非難した。〈与格〉は方言から発生していると指摘し、〈与格〉が限定的な用法であることを示した。また〈与格〉はフランス語の用法と指摘することにより、ドイツ語の用法ではないと指摘したのである。だから〈与格〉は間違っていると主張し、〈二重対格〉だけがドイツ語の用法であると主張し、〈二重対格〉だけが規範であると明文化したのである。

18 世紀に Adelung は、受動文で〈与格〉が使われていたら、その能動文でも〈与格〉になっていると主張した。しかしこの Adelung の説に賛成する文法家でも、受動文の〈与格〉と能動文の〈与格〉とを切り離す文法家もおれば、あるいは受動文では主語になると主張する文法家もいたからである。したがって 19 世紀では〈与格〉の勢いが強くなっているとは言っても、全面的に〈与格〉を認めようとする文法家は少なかったと言える。

このように 18 世紀後半に Adelung が提案した〈与格〉はいろいろと反論を受けながらも、少しずつ〈与格〉を文法家は受け入れるようになってきていると言える。

参考文献

Adelung, Johann, Christoph（1781）: *Deutsche Sprachlehre.* Berlin. S.473f.

Adelung, Johann, Christoph（1782）: *Umständlices Lehrgebäude der Deutschen Sprache*. Bd. 2. Leipzig. S.450f.［Nachdr. Hildesheim/ New York. 1971］.

Adelung, Johann, Christoph（1796²）: *Grammatisch-kritisches Wörterbuch der Hochdeutschen Mundart.* Ⅱ F-L. Leipzig. S. 1986ff.［Nachdr. Hildesheim/ New York 1970］.

Aichinger, Carl, Friedrich（1754）: *Versuch einer teutschen Sprachlehre.* Wien. S. 413f.［Nachdr. Hildesheim/ New York］.

Bausewein, Karin（1990）: *Akkusativobjekt, Akkusativobjektsätze und Objektsprädikate im Deutschen*. Tübingen. S.98ff.

Braun, Peter（1979）: „Beobachtungen zum Normverhalten bei Studenten und Lehrern.“ in :

Deutsche Gegenwartssprache, München. S.149-155.

Becker, Karl, Ferdinand（1829）: *Deutsche Grammatik*. Frankfurt am Main. S. 337.

Becker, Karl, Ferdinand（1870[2]）: *Ausführliche deutsche Grammatik als Kommentar der Schulgrammatik.* Bd. 2. Parg. S.200.

Behagel, Otto（1923）: *Deutsche Syntax.* Bd. 1. Heiderberg. S.698-701.

Brinkmann, Hennig（1971[2]）: *Die Deutsche Sprache Gestalt und Leistung*. Düsseldorf. S.406f., S. 441f.

Dal, Ingrid（1952）: *Kurze Deutsche Syntax*. Tübingen. S. 15f.

Dittmann, Jürgen（2003）: *Wahrig Fehlerfreies und gutes Deutsch.* Gütersloh. S. 514f.

Engel, Eduard（1918[21]）: *Gutes Deutsch*. Leipzig. S.271f.

Engelien, August（1892[4]）: *Grammatik der neuhochdeutschen Sprache*. Berlin.C. S.390f.

Fischer, Paul（1929）: *Goethe- Wortschatz*. Leipzig. S. 404.

Gottsched, Johann, Christiph（1762[5]）: *Vollständigere und Neuerläuterte Deutsche Sprachkunst.* Leipzig. S.466.

Götze, Lutz（2002[3]）: *Grammatik der deutschen Sprache.* Güterloh/ München. S. 444f.

Götzinger, Max, Wilhelm（1839）: *Die deutsche Sprache und ihre Literatur.* Bd. Ⅱ. Stuttgart. S.68f.［Nachdr. Hildesheim/New York 1977］.

Grebe, Paul（1959）: *Duden Grammatik.* Mannheim. S. 453.,（1966[2]）Mannheim/ Wien/ Zürich.S. 489.,（1973[3]）. S. 514.

Grimm, Jacob（1885）: *Deutsches Wörterbuch*. Bd. 16. L-M. Leipzig. S. 559-570.［Nachdr. München. 1984］.

Gurckes, Gottfried（1893[22]）: *Deutsche Schulgrammatik*. Hamburg. S. 122.

Heinsius, Theodor（1816[5]）: *Kleine theoretisch- praktische Deutsche Sprachlehre für Shulen und Gymnasien.* Berlin. S. 178.

Heintze, Albert（1895[6]）: *Gut Deutsch.* Berlin W. S. 142.

Heynatz, Friedrich, Johann（1803[5]）: *Deutsche Sprachlehre zum Gebrauch der Schulen.* Berlin. S. 245f.

Heyse, Johann, Christoph, August（1849[5]）: *Theoretisch-praktische deutsche Grammatik oder Lehrbuch der deutschen Sprache.* Bd. 2. Hannover. S. 117f.

Heyse, Johann, Christopf, August（1923[29]）: *Deutsche Grammatik oder Lehrbuch der deutschen Sprache.* Hannover/ Leipzig. S. 440f.

Kehrein, Joseph（1854）: *Grammatik der deutschen Sprache des fünfzehenten bis siebzehenten Jahrhunderts.* in drei Teilen. Leipzig. S. 115.［Nachdr. Hildesheim/ New York. 2004］.

Klopstock, Friedrih, Gottlieb（1839）: Die deutsche Gelehrtenrepublik. in: *Klospstocks sämmtliche Werke.* Bd. 8. Leipzig. S. 167.

Lyon, Otto（1897）: *Abriß der Deutschen Grammatik.* Leipzig. S. 109.

Michelsen, Konrad（1878[3]）: *Katechismus der deutschen Sprachlehre.* Leipzig. S. 120ff.

Moritz, Philipp, Karl（1794[3]）: *Deutsche Sprachlehre in Briefen*. Berlin. S. 167.

Paul, Hermann（1919[4]）: *Deutsche Grammatik*. Bd. Ⅲ . Teil Ⅳ . Halle $_{A}$. S. S. 253f.

Paul, Hermann（1935[4]）: *Deutsches Wörterbuch.* Halle/ Saale. S.321f.

Reinbeck, Georg（1802）: *Deutsche Sprachlehre zum Gebrauche deutscher Schulen*. Lübeck/ Leipzig. S. 84.

Reinbeck, Georg（1804）: *Deutsche Sprachlehre nehst Anleitung zu schriftlichen Aussätzen.* Hamburg. S. 108.

Reinbeck, Georg（1820）: *Deutsche Sprachlehre zum Gebrauche der deutschen Hauptschule zu St. Petri*. St. Petersburg. S. 80.

Sanders, Daniel（1908[43/44]）: *Wörterbuch der Hauptschwierigkeiten in der deutschen Sprache.* Berlin= Schöneberg. S. 253.［Nachdr. Tokyo 1968］.

Schmitthenner, Friedrich（1822）: *Deutsche Sprachlehre für Gelehrtenschulen.* Herborn. S. 260f.

Schmitthenner, Friedrich（1826）: *Ursprachlehre, Entwurf zu einem System der Grammatik.* Frankfurt am Main. S.263.

Schmitthenner, Friedrich（1828）: *Ausführliche teutsche Sprachlehre.* 1. Buch. Frankfurt am Main. S. 65.

Schötensack, Heinrich, August（1856）: *Grammatik der neuhochdeutschen Sprache*. Erlangen. S. 626ff.［Nachdr. Hildesheim/ New York. 1976］.

Stutz, Ernst, Johann（1789）: *Kleiner Beitrag zum Beförderung Deutscher Sprachrichtigkeit.* Zerbst. S. 47f.

Stutz, Ernst, Johann（1790）: *Deutsche Sprachlehre*. Potsdam. S. 407.

Stutz, Ernst, Johann（1793）: *Kleinere deutsche Sprachlehre zum Schulgrammatik.* Potsdam. S. 202.

Vernaleken, Theodor（1863）: *Deutsche Syntax.* 2. Theil. Wien. S. 13- 16.

Wegener, Heide（1986）: „Gibt es im Deutschen ein indirektes Objekt?“ in*: Deutsche Sprache* 14, Berlin. S.12-22.

Wöllstein, Angelika（2016[9]）: *Duden Die Grammatik.* Berlin S. 403, S. 943f.

Wenig, Christian（1896[8]）: *Handwörterbuch der deutschen Sprache.* Köln. S. 476.

Zifonun, Gisela（1997）: *Grammatik der deutschen Sprache.* Bd. 2. Berlin/ New York. S. 1084f.

柴亜矢子（2020）: lehren の二重目的語について－ゲーテ作品を手がかりに－ . 関西大学独逸文学会編『独逸文学』第 64, S. 1-26.

柴　亜矢子

Zwei Objekte beim Verb „lehren“ — Eine Untersuchung anhand von Anmerkungen bei den Grammatikern des 18. bis 20. Jahrhunderts —

Ayako Shiba

Wenn ein Verb zwei Objekte regiert, handelt es sich im Normalfall um einen Satzbauplan mit einem Akkusativobjekt（der Sache）und einem Dativobjekt（der Person）. Ausnahmen stellen Verben dar, die zwei Akkusative regieren. Ein zentrales Beispiel dafür ist das Verb „lehren“. Es kann zwei Akkusativobjekte zu sich aufnehmen, ein Akkusativobjekt der Sache und ein Akkusativobjekt der Person.

Das Verb „lehren“ kann auch mit einem Dativobjekt（der Person）und einem Akkusativobjekt（der Sache）gebildet werden. Der doppelte Akkusativ ist eigentlich nicht so ungewöhnlich, normalerweise wird „lehren“ jedoch mit einem Akkusativobjekt und einem Dativobjekt gebildet. Das heißt, beim Verb „lehren“ kann das Objekt der Person mit dem Akkusativ oder mit dem Dativ ausgedrückt werden.

Beim Verb „lehren“ ist die Anwendung des Dativobjekts der Person nicht eindeutig geklärt. Einige Grammatiker behaupten, dass beim Verb „lehren“ der doppelte Akkusativ notwendig sei, andere Grammatiker wiederum sind der Auffassung, dass das Objekt der Person je nach Kotext zwischen dem Akkusativ und dem Dativ schwankt.

Die vorliegende Arbeit stellt sich die Aufgabe, die Kasusverwendung im ersten Objekt von „lehren“（Objekt der Person）zu untersuchen. Anhand der Anwendung bei den Grammatikern aus der Zeit des 18. bis 20. Jahrhunderts wird die Kasuswendung beim Verb „lehren“ genauer untersucht und analysiert.

Die meisten Grammatiker des 18. Jahrhunderts（Aichinger, Gottsched, Moritz, Adelung, Heynatz und Stutz）und des 19. Jahrhunderts（Schötensack, Sanders, Grimm, Gurcke, Heintze, Lyon, Heyse）sprechen sich in Bezug auf das Verb „lehren“ für den Gebrauch des Akkusativs der Person aus. Die Verwendung des Dativs der Person ist dagegen nicht korrekt（Gottsched 1762[5]:

466). Ohne Zweifel ist in dieser Zeit der Akkusativ der Person gebräuchlicher als der Dativ der Person.

Im Laufe des 19. Jahrhunderts wird das Dativobjekt der Person häufiger verwendet, fast genauso oft wie das Akkusativobjekt der Person. Darauf verweisen（Heintze 1897[8]: 142f）und（Schötensack 1856: 626ff.）mit der Anmerkung: Wenn das Akkusativobjekt der Person in den Werken verwendet wird, dann wird auch vom Dativobjekt der Person Gebrauch gemacht.

Wie das Akkusativobjekt der Person, so hat auch das Dativobjekt der Person eine eigene Geschichte. Schon im Mhd. findet sich vereinzelt der Dativ der Person（Heinze 1897[8]: 142f.）In Hinblick auf die lange Geschichte wird der Dativ der Person fast genauso häufig verwendet wie der Akkusativ der Person. Bei dem Verb „lehren“ ist die Kasusverwendung der Person schwankend（Becker 1829: 337),（Gurckes 1893[22]: 122).

Auch bei Goethe（Shiba 2020）lässt sich diese Schwankung im Gebrauch des Kasus der Person sowie eine Tendenz hin zum Gebrauch des Dativs feststellen. Anfangs gebraucht Goethe den Satz（Sie lehrte **ihn** kleine Lieder.）mit dem doppelten Akkusativ. In der dritten Auflage verändert er jedoch diesen Satz（Sie lehrte **ihm** kleine Lieder.）mit dem Satzbauplan eines Dativs und eines Akkusativs. Dieses Beispiel zeigt, dass der Unterschied zwischen dem Akkusativ und dem Dativ nur gering ist.

Es gibt allerdings Grammatiker（Heyse 1923),（Behagel 1923),（Paul 1935[4]), die für den Gebrauch des Akkusativobjekts der Person votieren und sich gegen den Gebrauch des Dativobjekts der Person aussprechen. In diesem Zusammenhang werden drei Argumente angeführt: 1. Das Dativobjekt ist grammatisch nicht richtig, 2. Das Dativobjekt gehört zur Volkssprache und 3. Das Dativobjekt kommt aus Frankreich. Über die Anmerkung 1（Das Dativobjekt sei nicht richtig）äußert sich（Heyse 1923[29]:441）wie folgt: Diese willkürliche Neuerung, die recht eigentlich einen Beweis gibt, wie durch grammatische Willkür das Leben unserer Sprache geschädigt worden sei. „Diese willkürliche Neuerung“ zeigt sich bei der Verwendung des Dativs der Person. Wenn beim Verb „lehren“ die Person im Dativ steht, wird das Leben des Deutschen „zerstört“. Der Dativ der Person kommt aus Frankreich（Heyse

1923[29]: 441)，(Behagel 1923: 700)，(Paul 1935[4]: 321f.). Deshalb kann man Anmerkung 3.(Das Dativobjekt kommt aus Frankreich) so interpretieren, dass der Akkusativ der Person Deutsch sei. Das heißt, der Dativ ist Französisch und der Akkusativ ist Deutsch. Wenn man Deutscher ist, sollte man beim Verb „lehren" den Akkusativ der Person gebrauchen.

Über die Anmerkung 2.(Das Dativobjekt gehört zur Volkssprache) bemerkt (Behagel 1923: 700), dass der Dativ der Person der süddeutschen Volkssprache angehört. Diese Behauptung deutet darauf hin, dass nicht alle Deutsche den Dativ der Person verwenden. Das heißt, der Gebrauch des Dativs ist eingeschränkt, das Dativobjekt beim Verb „lehren" ist nicht allgemein üblich. Diese drei Aspekte verdeutlichen, weshalb einige Grammatiker den Dativ der Person ablehnen.

Die Analyse verdeutlicht, dass sich die Grammatiker aus der Zeit des 18. und bis des 20. Jahrhunderts mehrheitlich für den Gebrauch des Akkusativs der Person aussprechen. Im Verlauf des 19. Jahrhunderts erfolgt dann ein allmählicher Wandel, das Verb „lehren" kann sowohl mit dem Dativ der Person (Er lehrte **mir** das Schreiben.) als auch mit dem Akkusativ der Person (Er lehrte **mich** das Schreiben.) ausgedrückt werden, aber nur das Akkusativobjekt der Person wurde als Sprachnorm angesehen. Langsam wird auch der Dativ der Person.